研修A
「文化間移動をする高校生の
日本語指導」

2024年７月７日
2024年度　オンライン研修
「多様性が活きることばの教育」
東京学芸大学　先端教育人材育成推進機構
外国人児童生徒教育推進ユニット

# 群馬県立太田フレックス高等学校

# 「日本語指導」への取り組み

2024年7月7日

日本語コーディネーター 佐藤創

# 太田フレックス高等学校は…

- 定時制課程と通信制課程を併設する普通科、単位制高校。
  - 定時制課程にはⅠ部（主に午前中の登校）、Ⅱ部（主に午後の登校）、Ⅲ部（主に夕方～夜間の登校）の３つの部がある。
  - 通信制課程は、登校は月に２回程度で、その他は自宅で学習し、レポートを作成して提出。
  - ３年以上在籍し、７４単位以上修得すると卒業できる。
  - 完全単位なので、「履修計画（時間割＋卒業年限）」は自分で決める

# 太田フレックス高等学校は…

- 本校の「外国人等生徒」（定時制課程I･II部　2024年）
  - ＜国籍＞例年、全生徒の25%（4人に1人）程度。
    - 本年度は422人中115名（27.3%、19ヶ国）
  - ＜言語＞「①日常会話が困難」 または「②学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加が困難」
    - 本年度は76名（18.0%、19言語）
    - 少数言語話者が増え、多言語化が進んでいる。

# 太田フレックス高等学校は…

- 開校は2005年（←「太田西女子高校」閉校）
- 立地＝群馬県太田市・大泉町（集住地域）
- 開校構想に「学び直し」や「外国籍生徒対応」が盛り込まれる
  - 当初から「日本語」の授業設置も構想。

# 定時制 960人規模

## 太田西女のフレックス校

# 外国・社会人に対応

## 県教委が新5高校構想 数理、国際科

県教委は二十四日、高校再編整備に伴い、二〇〇五年四月に開校予定の五校の基本構想を発表した。太田西女は定時制、通信制二課程（単位制）の「フレックススクール」に改編し、定時制課程を午前、午後、夜間の三部からなる四学年九百六十人規模とし、社会人や外国人子女も学べるようにする。藤岡と藤岡女、伊勢崎東と境はそれぞれ数理科学科と文理総合科、国際科と文理総合科を持つ新高校に統合、伊勢崎女は大学進学を意識した単位制高校、伊勢崎興陽は「食と生活」をテーマにした総合学科高校に生まれ変わる。この五校はいずれも男女共学とし、全県一区で生徒を募集する。

太田西女を改編するフレックススクールは本県独自の呼称。生徒の生活様式や就学条件にあわせて学ぶ時間と科目が選べるようにし、午前部、午後部、夜間部とも一学年二クラスとする。定時制課程は四年制だが、在籍以外の部の科目を履修することにより、三年間でも卒業できる。

同スクールは高校卒の社会人が生涯学習として、体系的に学問を学ぶ機会も設ける。「群馬の歴史」「新田の杜（もり）」など、地域に根ざしたユニークな科目をつくり、一科目から受講ができるようにする。県教委は「異なる世代の人と一緒に学ぶのは、特に十代の生徒に大きなプラスがある」としている。

いずれの高校も従来より選択の幅を持たせ、生徒の多様な学習ニーズに応えるのが狙いだ。

また、外国人住民が多い周辺地域の課題に応えるため、外国人子女で日本語の理解が十分でない生徒に対応できる学習プランを充実させる。また、日本の社会人向けにポルトガル語、スペイン語の基礎講座も開講する。

藤岡と藤岡女を統合してつくる新高校は、数理科学科一学年二クラスと文理総合科同四クラスを設置。県内初となる数理科学科は数学、理科に重点を置き、先端研究機関と連携した特別授業を行う。文理総合科は文系、理系の枠にとらわれず、個々の進路目標に応じて学習できるようなカリキュラムを組む。

伊勢崎東と境を統合する新高校は、真の英語が使える人材育成を目指す国際科一学年二クラスと、文理総合科同六クラスを設置。伊勢崎女を改編する新高校は同六クラス、一日七時限とし、生徒の自学自習による「SSタイム」（仮称）をつくり、伊勢崎興陽は九十

## 紅葉 一晩で雪化粧

### 5日早く初雪

谷川岳

谷川岳や朝日岳など県北部の山々で二十四日、うっすらと雪が積もった。二十三日夕から降り出した雨が同日夜に雪に変わり、水上町の谷川岳・天神平では二十四日午前二五㌢の積雪を記録、昨年より五日早い初雪となった＝写真。

標高約一三〇〇㍍にある谷川岳ロープウエーの天神平駅周辺は同日午前五時ごろに氷点下一度、午後三時に四度と冷え込み、厚着をしていた観光客はブルブルと震えるほど。それでも、紅葉との鮮やかなコントラストを見せる銀世界に思わず感嘆の声を上げたり、熱心に写真撮影をする人の姿も見られた。

基本構想発表を報じる新聞（平成15年10月25日『上毛新聞』１面）

# 太田フレックス高等学校は…

- 外国籍を含むさまざまな生徒に対応するための学校設定科目を設置
  - 卒業単位に最高20単位まで加えられる
  - 学び直しの科目:例「ことばと生活（国語科）」「みんなの数学（数学科）」
  - 日本語・日本文化・地域文化関係科目:例「日本語」「日本理解」「スペイン語」「ポルトガル語」

    など

# 太田フレックス高等学校は…

- 開校～H25（2013年）までの「日本語」実施

| | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012＊ | 2013 | 2014 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 平成17年 | 平成18年 | 平成19年 | 平成20年 | 平成21年 | 平成22年 | 平成23年 | 平成24年 | 平成25年 | 平成26年 |
| 設定 | I･II部 | Ⅲ部 | Ⅲ部 | Ⅲ部 | Ⅲ部 | Ⅲ部 | Ⅲ部 | Ⅲ部 | Ⅲ部 | なし |
| | 開講せず | 木６ | 開講せず | 月６ | 開講せず | 開講せず | 火５水５ | 開講せず | 開講せず | |
| 履修者 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | |
| 修得者 | 0 | 2 | 0 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | |
| 担当教科 | 外国語科 | 国語科 | | 国語科 | | | 外国語科 | | | |

・教育課程上は、「外国語科」（教科）の中に「日本語」（科目）として設定（別の資料参照）

・実際の担当者は、「国語科」。

・成績会議資料では「外国語科」の欄だったり「国語科」の欄だったり統一されていない。

＊2012年より「学習クラブ」（NPOによる放課後の外国人生徒学習支援活動）スタート

# 太田フレックス高等学校は…

- ７年間のうち３年で講座実施、そののち講座が消滅

- 持続できなかった理由（当時の職員に聞き取り）
  - 「日本語指導が必要だ」という職員側の認識はあったが、、

  - しかし、生徒の受講希望者が少なかった。
    - （ニーズをもつ生徒もいたが完全希望制で講座成立せず）

  - また、職員が無理をしてやっていた。
    - （指導できる人、指導スキルの蓄積がない。負担感のみ）

# 「日本語指導」の取り組み（2023年）

## 「特別の教育課程」の試験的導入へ

- 群馬県
  - 「高等学校等における日本語指導の体制作り」の推進
    - 「体制づくり会議」の設定（有識者による検討主体）
    - 本校をモデル校に指定
    - 9月より「日本語指導支援員」（１日３時間、週2回）が２名配置。
    - 多言語通訳機器が３台貸与。
  - 入学者選抜方法の変更
    - R6年度入試より「外国人生徒等入学者選抜」が始まる。
    - 対象生徒は「国語」に替え「作文」、「理社」に替え「面接」。定員はなく、募集定員に含める。

# 「日本語指導」の取り組み（2023年）

## 「特別の教育課程」の試験的導入へ

- 校内
  - 「日本語指導委員会」がおかれ、実践研究を行う。
  - 委員会の活動・検討事項
    - ①本校での「日本語指導」の位置づけ
      - 在籍３～４年間で「できること」「めざすもの」
    - ②日本語指導の対象生徒の選定について
      - 「受講は希望制である」という本校の原則に反する方針
    - ③日本語指導体制の実際（授業の試行）
      - どんな講座を、いくつ、どのように設置するか。
    - ④次年度の準備

# 「日本語指導」の取り組み（2023年）

## 「特別の教育課程」の試験的導入へ

- 校内
  - ①本校での「日本語指導」の位置づけ
  - 本校の教育目標：「生涯学び続けることができる」生徒育成
    - 今、完全には身につかなくても、卒業後も日本語を学び続けるための素養・下地を、短い３～４年間で身につけさせたい。
    - それは「日本語は、がんばれば身に付く」「この多文化の社会の中で自分で学んでいこう、という意欲や自信、手応えを育て・感じさせる」こと
  - そのためには、日本語指導の場は日本語の授業だけにとどまらない。日本語の授業だけでは不足。ゼミや各講座、学校行事、部活動、進路キャリア指導場面など、あらゆる機会を活用して進める。

# 「日本語指導」の取り組み（2023年）

## 「特別の教育課程」の試験的導入へ

- 校内
  - ②「個別の教育課程」の対象生徒の選定
    - 日本語指導のニーズが高い生徒は多数在籍するなかで
    - 特に「登校率」「授業参加率」の高い生徒を抽出。
    - さらに夏季休業中の三者面談にて保護者がこの指導に同意した生徒

# 「日本語指導」の取り組み（2023年）

## 「特別の教育課程」の試験的導入へ

- 校内
  - ③「個別の教育課程」の実施
  - 対象生徒は５名。月曜３限に３名、水曜3限に２名。

| 時刻 | 校時 | 月曜 | 火曜日 | 水曜 | 木曜 | 金曜 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 9:00～<br>10：30 | 1 | | | | | |
| | | | | | | |
| 10：50～<br>12：20 | 2 | | | | | |
| | | | | | | |
| 13：10～<br>14：40 | 3 | 日本語基礎 | | 日本語基礎 | | |
| | | | | | | |
| 15：00～<br>16：30 | 4 | | | | | |
| | | | | | | |

# 「日本語指導」の取り組み（2023年）

## 「特別の教育課程」の試験的導入へ

- 校内
  - ③「個別の教育課程」の実施
    - 実際に授業をしながら、実施の仕方、教材、生徒の実態把握の仕方、個別の指導計画作成や評価、単位認定の方法等について研究を進める。
    - 県より配置された２名の日本語指導支援員とも相談しながら進める。
    - 当初は「みんなの日本語」など系統的なテキストを選定しながら、その生徒のレベルに合わせて積み上げていく学習を構想
    - 実際は、
      - 生徒のスタートラインが一致しない（できること、できないことがデコボコ）
      - 生徒の意欲が「平均的高校生レベル」（家での課題はやらない、つまらない授業では注意散漫になる、など）
    - 系統的なテキストでは対応できないと感じ始めた。
  - →生徒達のニーズと関心に合わせた教材・教案づくりに行き着く。

# 「日本語指導」の取り組み（2023年）

## 「特別の教育課程」の試験的導入へ

- 校内
  - ④次年度への準備（１～３月）
  - 在校生：
    - 「日本語Ｉ」受講希望調査。アセスメントテストを実施（筑波 TTBJ）。授業や課外活動への参加姿勢を加味して受講登録者の決定。
  - 新入予定者：
    - 合格発表後に、各中学に「日本語指導が必要な（合格）生徒」の聞き取り。対象生徒を３月中に登校させ、アセスメントテストの実施。
    - 入学準備説明会で保護者への「日本語指導を受けることで卒業年限が４年になる」説明。
    - 履修登録指導にて、日本語指導対象者の時間割作成支援（国・数・英の必履修科目＋体育＋芸術を中心とした時間割）

# 「日本語指導」の取り組み（2024年）

## 2年目：「特別の教育課程」と「学校設定科目」併設へ

- 校内
  - ①本校の「日本語指導体制」のコンセプトの明確化
  - ②日本語指導の実際
    - ひとまず、「チャレンジ」

# 「日本語指導」の取り組み（2024年）

## 2年目：「特別の教育課程」と「学校設定科目」併設へ

- 校内
  - ①本校の「日本語指導体制」のコンセプトの明確化
    - 「日本語教育の専門家でない」一般職員が
    - 誰でもできる「日本語指導」を
    - 「持続可能な」体制づくり

# 「日本語指導」の取り組み（2024年）

## 2年目：「特別の教育課程」と「学校設定科目」併設へ

- 校内
  - ②日本語指導の実際
    - 「日本語基礎(特別の教育課程)」と学校設定「日本語Ⅰ」

| 時刻 | 校時 | 月曜 | 火曜日 | 水曜 | 木曜 | 金曜 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 9:00～10：30 | 1 | | 共生部会 | | | |
| | | | | | | |
| 10：50～12：20 | 2 | 日本語基礎 | | | | 日本語基礎 |
| | | | | | | |
| 13：10～14：40 | 3 | | 日本語Ⅰ | | | 日本語Ⅰ |
| | | | | | | |
| 15：00～16：30 | 4 | | | | 日本語基礎 | |
| | | | | | | |
| 17：30～19：00 | 5 | | | | | |
| | | | | | | |
| 19：20～20：50 | 6 | | | | | |

# 「日本語指導」の取り組み（2024年）

## 2年目：「特別の教育課程」と「学校設定科目」併設へ

- 校内
  - ②日本語指導の実際
    - 「日本語基礎」
      - 特別の教育課程。
      - 月曜２限,木曜４限,金曜２限の週３講座。対象生徒各2名（計6名）
      - ＴＴ。複数職員＋日本語指導支援員
    - 「日本語Ｉ」
      - 学校設定科目。
      - 火曜3限、金曜3限の週２講座。火曜は14名、金曜13名受講
      - ＴＴ。複数職員＋日本語指導支援員

# 「日本語指導」の取り組み（2024年）

## 2年目：「特別の教育課程」と「学校設定科目」併設へ

- 校内
  - ②日本語指導の実際
    - 「日本語指導担当」は「共生部」として校務分掌化。
    - 現在５名体制。（国語２名、公民１名、数学１名、外国語１名）
    - 負担の軽減（１＋１＜２に）。分掌会議の定例化（週１回火曜１限）
    - 分掌の議題の１つに必ず「次時の授業案検討」を入れ毎週検討。

# 「日本語指導」の取り組み（2024年）

## 2年目：「特別の教育課程」と「学校設定科目」併設へ

- 校内
  - ②日本語指導の実際
    - 本校の１時限が90分と長いことから、「アクティビティ」と結びつくような展開を心がける。
      - 「授業のルールを知ろう（マナー、持ち物）」
      - 「自己紹介をしよう（聞いて、他己紹介をしよう）」
      - 「自分の目標を立てよう」
      - 「校舎探検とマップ作り（先輩後輩でチームを組んで）」「そこへは、どう行きますか（説明をしよう）」
      - 「先生方にインタビューをしよう」
      - 「前期中間考査のルールを知ろう（〇×クイズ）」
      - 「自分のテスト時間割を作ろう」

# 日本語Ｉの授業のようす

「自己紹介をしよう（聞いて、他己紹介をしよう）」

# 日本語Ｉの授業

日本語Ｉの授業のようす

「自己紹介をしよう（聞いて、他己紹介をしよう）」

# 日本語基礎のようす

「校舎探検とマップ作り」「そこへは、どう行きますか」

# 日本語基礎のようす

「校舎探検とマップ作り」「そこへは、どう行きますか」

# 2年間の取り組みを振り返り

## 取り組みの成果と課題

- （職員から見た）生徒たちの変化
  - 以前在籍していた生徒よりも、日本語の定着が早いように感じられました。
  - 日本語を覚えようとする姿勢が強く見られるようになったと感じている。
  - 生徒自身も日本で生活するには日本語が非常に大切になってくることを感じる機会にもなっている。
  - 一概に比較できないが、今年度色々な「日本語指導」を試みたことで、日本語学習に対するモチベーションの高い生徒が多くなった気がする。彼ら彼女らのやる気が削がれないように、引き続き２年目、３年目の指導・支援を止めないことが、重要となる気がする。
  - 日本語力が上達することで、自信を持つことができた。
  - 外国籍の生徒にとっては学校生活が送りやすくなったと思う。
  - 授業の感想入力等で、日本語が上手になってきたと感じることが増えました。

# 2年間の取り組みを振り返り

## 取り組みの成果と課題

- （生徒自身の声）
  - 漢字を少し覚えた。日本語を話せるようになった。
  - 先生方にインタビューをしたのが良かった。
  - 自分がわからなかったことが、授業でわかりました。
  - 天気の授業を覚えています。みんなと楽しく授業ができた。
  - この日本語の授業があったから、たくさんの漢字をしゃべるようになれた。
  - テ形の文法を覚えました。
  - 新しい単語を覚えられてよかった。
  - 授業がちょっとうるさいけど楽しかった。
  - 校長先生にインタビューをした。
  - 日本語を得意にしたい。
  - 前よりも日本語がしゃべれるようになってきました。

# 2年間の取り組みを振り返り

## 取り組みの成果と課題

- （職員から見た）職場の変化
  - 初級の外国籍の生徒が、積極的に放課後の学習支援へ参加するようになった。
  - 外国籍の生徒に対する支援が充実。生徒にとっても教員にとっても非常にありがたい。
  - 職員間での「日本語指導」に対する意識の向上は絶対にあったと思う。
  - 以前から意識されて指導されていた先生方もいたが、そういった先生方のモチベーションの向上にも、繋がっていたと思う。
  - 「やさしい日本語」で生徒・保護者への通知をするなど、外国ルーツの生徒・保護者に配慮しようという雰囲気が生まれたと感じている。
  - 授業においてもユニバーサルデザインに配慮した授業展開とすることができた。学校の活性化につながった。
  - 日本語指導についての関心が高まったように思う。

# 2年間の取り組みを振り返り

## 取り組みの成果と課題

- （職員から見た）指導・支援方法の変化
  - 以前は「日本に来ているのだから、これくらいは本人の努力でできてもらわないと」という意識が職員間でも強かったと思うが、今はそういった生徒にどうアプローチできるかという意識を持っている先生が増えてきた気がする。
  - 板書やテスト問題にふりがなをふる、やさしい日本語で話す・書くなど、心がけるようになったと感じている。
  - 授業内容が深められなくなってしまった。
  - 日本語指導の視点を意識する機会が増え、生徒への指導・支援の形を考えるようになった。
  - 支援の方法等を共有することで、生徒の実情にあった指導方法を共有することができた。
  - 真面目に日本語を習得しようとしている生徒への援助ができたのではないでしょうか。
  - 日本語が上手になった生徒も増えたように思う。

# 2年間の取り組みを振り返り

## 取り組みの成果と課題

- 今後に向けて
  - 年度末の入学生徒の実態把握をより精緻に
    - ニーズがあったのに支援から漏れている生徒がいる。
  - 日本語Ⅱ、Ⅲの設計
    - ⅡはJLPTを取り入れ、Ⅲはキャリア支援に力を入れる。
  - 外部との連携のさらなる強化
    - 外部のNPO法人や、県内の各大学との連携事業を強化したい。

# 2年間の取り組みを振り返り

## 取り組みの成果と課題

- 今後に向けて
  - 授業の質の向上
    - コンセプトの反面、授業の質が担保できていない。
    - 「文法など」をどの程度、系統的に取り上げるかなど担当者内でも検討
  - 学習グループ内での生徒の日本語力の差がある
    - 今後「日本語Ⅱ」「日本語Ⅲ」を設置する中で解消されるか？
  - 生徒のニーズに答えられているのか
    - 「日本語Ⅰ」の授業への欠席者が増加傾向である。
    - 単位となる講座を設定したが、生徒自身の目標設定や学習のプロセスのイメージ化が追いつかない。